

1 研究主題

書く力を育てる指導の工夫（2年次）

～国語科の「書くこと」の授業改善と日常的な指導を通して～

2 研究の基盤

(1) 今までの研究より

本校では、令和2年度から4年度までの3年間、国語科の説明的文章・文学的文章における言葉による見方・考え方を大切にしたい授業づくりの研究を行ってきた。

①着眼点の明確化、②思考スキルを「見える化」できる思考ツールの工夫、③ついた力が意識できる（次へつながる）ふり返りの3つを視点として取り組んだことによって、「何を学習するのか」が児童に明確に伝わり、個人思考ができるようになったり、学年の発達段階やめあてに沿った思考ツールを工夫したりすることで、できたという達成感をもち、意欲的に取り組む児童が増えたりするという一定の効果があった。

昨年度は、その3つの視点を引き続き大事にしなが、本校の児童が特に苦手とする「書くこと」に絞って研究することとした。

その結果、学力調査では、「自分の意見を明確にして書くことができる」児童が以前より増えてきた。また、ある学年では、4月の市の学力調査の正答率が56.0であったが、11月の県学力調査では、59.1になるなど、わずかではあるが国語の力が少しずつついてきている。

また、着眼点の明確化、思考ツールの工夫、ついた力が意識できるふり返りという3つの視点は、「書くこと」においても、『どの児童も参加できる授業』の有効な手立てであることが分かった。

さらに、5つの学習過程（①材料集め②組み立て③文章化④修正⑤読み合う）を「見える化」し、意識させることで、文章を書くために必要な手順が明確になり、見通しをもって学習に取り組むことができた。指導者側も学習過程を明らかにすることにより、この単元ではどこに重点を置くのかを確認して単元構成をすることができた。

(2) 児童の実態と教科書の改訂より

全国学力・学習状況調査等の分析をもとに、本年度から教科書が改訂された。全国的に「複数の資料を関係づけて読む」「情報を整理して適切に表現する」等の正答率が低い。これからの時代は、膨大な情報を主体的に活用し、様々な手段で表現する力がより必要となってくる。

本校の児童も、「情報の扱い方に関する事項」の問題や要旨をまとめたり、制限のある文章を的確に書いたりする問題において、無回答であったり、間違えたりすることが多い。

新教科書では、今まで「読むこと」の領域に複合的に組み込まれていた「書くこと」が、新設された「情報のとびらコーナー」で「読むこと」と「書くこと」の教材をつなぐことによって、各領域のねらいを焦点化させつつ、関連的に指導できる構成になっている。つまり、今まで以上にそれぞれの領域のつけたい言葉の力が明確になったと言える。少しずつ力はついてきたが、書ける子と書けない子の差が大きい本校の児童の実態や課題をもとに、さらに目指す力に沿った授業を展開していく必要がある。

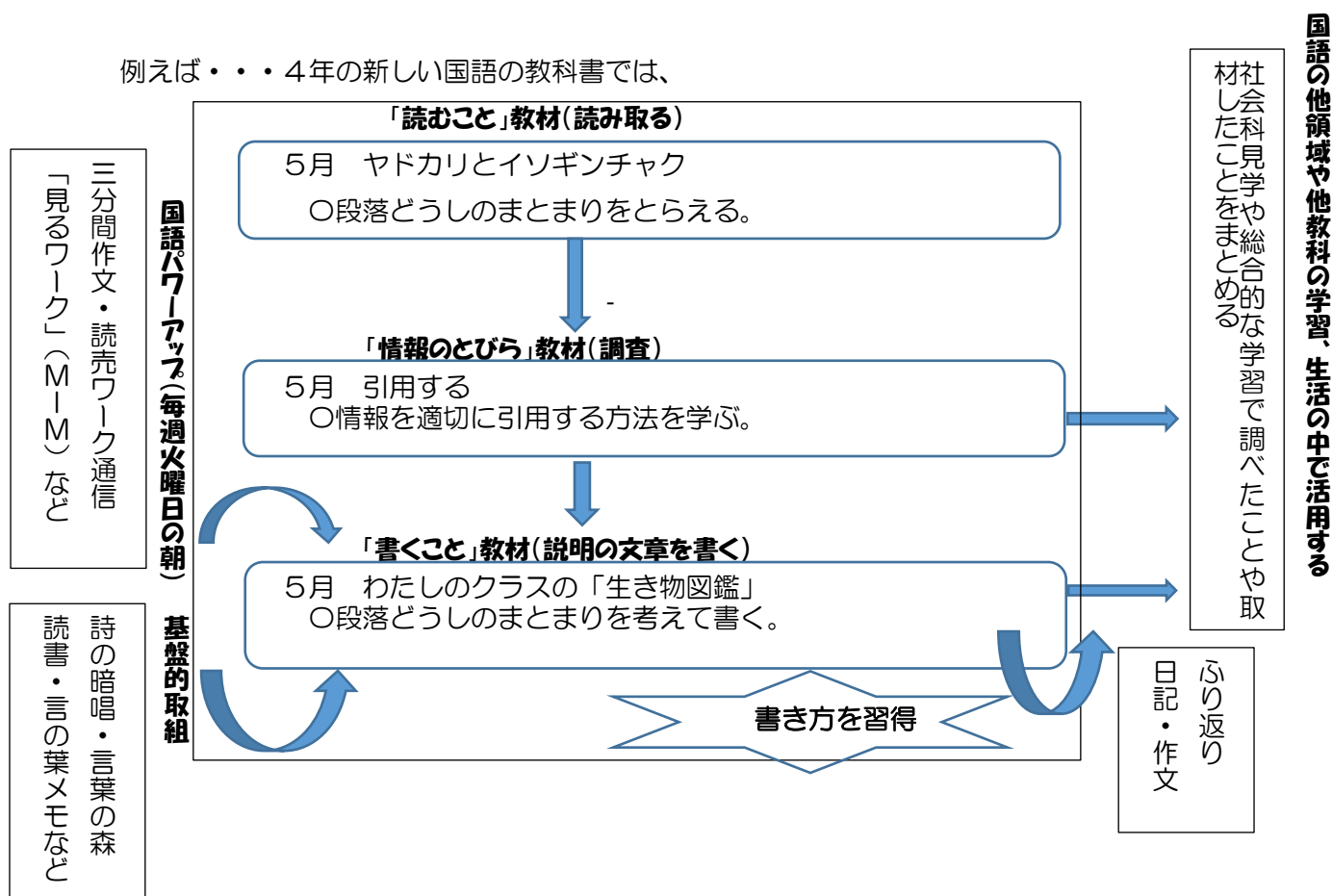
(3) 日常的な指導より

数年来、全校で取り組んできた以下の「言葉の力アップの取組」（基礎的な言葉の力をつけるため）の積み重ねで、少しずつ力はついてきていると思われる。

- ① 時間内にある程度の文章を書いたり、条件に沿った文章を書いたりする力をつける。
- ② 言葉のまとまりを見つけ、初見の文章でも読んで内容を理解する力をつける。
- ③ 読書環境や言語環境を整えたり、新しく知った言葉を書き留めたり、詩などを暗唱したりして語彙を増やす。

この取組は、新教科書の編集のポイントの一つである『言葉を使う土台を作る』（「新編新しい国語」活用の手引き3 東京書籍より）ことにもつながり、「書くこと」の重要な要素である文法事項の定着とも関連させて指導していきたい。

例えば・・・4年の新しい国語の教科書では、



3 研究のねらい

様々な場面で、自分で書くことのできる子どもを育てていくために、5つの学習過程を大切に「書くこと」の授業改善と日常的な指導をつなげることで、効果を検証する。

4 研究仮説

(1) 基本仮説

「書くこと」の授業改善と日常的な指導をつなげていけば、書き方を習得し、意欲的に書くことができる子どもが育つであろう。

(2) 具体仮説

- ① 5つの学習過程を「見える化」し、単元を通して、今何をすべきかを意識した授業を行えば、自主的に「書くこと」ができる子どもが育つであろう。(5つの学習過程)
- ② 授業の中で、どこに着目し、どんな思考ツールが適しているかを考え、ついた力をふり返るサイクルを継続することで、書き方を習得し、学びを深める子どもが育つであろう。(授業力)
- ③ 国語パワーアップの取組を継続したり、日常的に書く機会を意図的に設けたりすることで、基礎的な力をつけ、もっと書きたいと思う子どもが育つであろう。(基盤)

5 研究の内容

① 5つの学習過程

「書くこと」の5つの学習過程を「見える化」し、児童が意識できるようにする。

☆本校では、①材料集め

②組み立て

③文章化（文にする）

④修正（直す）

⑤読み合う

という言葉で提示する。（ ）は低学年。

② 授業力

めあてや言葉の力をつけるためには、何に目をつければよいかを明確にし、どんな思考ツール（表・付箋・タブレットなど）が適しているかを発達段階や子どもの実態等を考えながら工夫する。

何を学び、どんな見方や考え方が身に付いたかをふり返るような内容を書いたり、話したりできるように、児童の意識を高めていく。

③ 基盤

○国語パワーアップの取組

- ・制限時間内に速く書く力をつける ➡8分間作文、条件作文（段落2つ、理由など）

- 語句のまとまりを見つけて、語彙をふやす☐「見るワーク」MIM
- 初見の文章（旬の情報）を読み取る☐読売ワーク通信

○日常的な指導

- 各教科におけるめあてに沿ったふり返りをノートに「書くこと」の積み重ね
- 日記や連絡帳の1文ふり返りなど各学年で「書くこと」の活用として、継続できる言語活動を決めて取り組む。

○その他

- 新聞の活用
- 今月の詩
- 言の葉メモ
- 読書環境の整備
- 読書活動の推進
- 校内掲示「ことばの森」

6 研究組織

